『論叢』玉川大学教育学部紀要　第22号　2022，pp. 67～85

［原著論文］

子育ての当事者が語る日本の子育て環境の課題と可能性
――トルコ・インド・チェコ・日本の子育て経験から見えるもの――

菊池里映*・尾上佳代**・田甫綾野*

要　約

本研究はトルコ・インド・チェコ・日本といった多文化の中で子育てをしてきた子育て当事者であり，保育専門家である筆者らのグループインタビューを通して，海外での子育て体験の語りをもとに，日本の子育て環境の課題と可能性を探るものである。かつての共同体が喪失した日本の現代社会の子育ては，社会からの支えも共感できる目的も得難く，母親個人の営みとして苦痛を強いられるものとさえなっていることが指摘された。母親がこの苦痛を乗り越え，主体的に子育てをしているという実感を得ていくために，自助と共助の体験によって，子育てを良いもの，子どもはかわいいものと「共感」し，母親自身が肯定的に受け入れていくことの重要性を説く。これらの結果から，日本において新たな共助的集団を生成すること，その為に幼稚園・保育所や子育て支援施設の果たす役割の大きさを示唆した。

キーワード：子育て当事者，語り，共感，豊かな子育て環境，主体性，子育て支援

序

問題設定

近年，子ども家庭支援センターや子育て広場など，子育てに関する地域資源が急ピッチで整備され，長年の課題とされてきた保育所の待機児童問題も解消の兆しをみせている。しかし，依然として母親たちの抱える子育ての困難さや不安は弱まることはなく，相談相手や育児サポートの有無，就労状況，ママ友との関係などといった，母親を取り巻く子育て環境の影響を多大に受けている。さらには，公園や保育所など子どものためにある空間に対してでさえ，「騒音」へのクレームの声が上がっている。このように，子どもが忌避されることのない豊かな子育て環境で子どもを産み育てられているという実感を母親が得られているとは言い難い状況である。

松居和は，著書「ママがいい！」の中で，現在の我が国における子育て支援において，施設

所属：*教育学部乳幼児発達学科　**元横浜YMCAスポーツ専門学校　受理日　2023年2月24日

が「親より長時間子育てしている」可能性と，その上で，「この方向へ進んで，結局少子化傾向を食い止めることはできなかった」ことを指摘した[1)]。つまり，子どもを長時間預かることのみでは，子どもを持ちたいという母親の動機に繋がりにくいことを示唆する。

また，保育施設における遊び生成の方法論を構築した小川博久（2010）は，「遊び保育論」において，「保育の危機」を「親と子が共に暮らす生活のペース」が蔑ろにされ，そのことにより，「（大人が）子どものペースを無視しつつある」と論じた[2)]。そこでは以下のように述べている。

> たしかに今不景気で働きにいかなければならない共働きの女性が子どもを預ける施設を求めているというニーズもある反面，子育てから解放されたいというニーズをこの待機児童の増加は反映しているのである。―中略―しかし，この子育てからの解放を求める声が育児不安を反映しているということは，親が子どもの所有権を放棄したことを意味しているわけではない[3)]。

母親たちは，スパルタやかつてのキブツのように，子育てを完全に個人の役割から切り離すことを望んでいるわけではない。「親と子が共に暮らす生活のペース」を保ちながら，主体的に子育てをしているという実感を母親自身が持てることこそが，今私たちに必要な「子育て支援」といえるのではないだろうか。そして，このような子育て環境を創造していくために，我が国には何が必要なのだろうか。

本研究では，日本だけでなくトルコ・インド・チェコといった多文化の中で子育てをしてきた子育て当事者であり，保育の専門家である筆者らの経験から浮かび上がる日本の子育て環境の課題と可能性について明らかにしていく。

なお本研究では，家庭での子どもの主要な養育者として「母（親）」を思考の対象とした。確認するまでもなく，父親や祖父母と行った母親以外の同居家族が子どもの養育を主に行う姿は，歴史的にもみられ，また現代社会においては積極的な評価がなされている。しかし，本稿で引用した本田和子，オルナ・ドーナトなど，社会における子育ての位置付けについて探求した論考において現代もなお子育てが母親の問題として語られることからは，主要な養育者としての母親に対して改めて眼差しを向けることの必要性が捉えられる。

先行研究

> かつて伝統社会の『家制度』は，社会の基礎単位であって，秩序の維持保全に機能させられていた。―中略―無事に男子を誕生させ家の継承者にふさわしく育て上げるなら，それで母親の責任が果たされたと見なされていた[4)]。

本田和子（2008）がこう指摘するように，かつての子育ては，社会の基礎単位である「家」を維持する重要な役割として認識されていた。その重要さゆえに，子育ては親だけではなく，その家の従者や近隣の人々を含む大きな集団からの注力を受け，また，その中心にいた母親は，その集団＝共同体で確固とした役割を得てそれを全うすることが己の生き方となったのであろう。

本田はこれに対して，現代の子育て環境について以下のように述べる。

> （「家」制度の解体などにより）「子ども」の存在意義が希薄化し続ける今日，「産み育てる」営みは，若い男女に義務として押し付けられようはずもなく，また，彼らが，唯々として引き受けられるものでもなくなりつつあるように見える。つまり，誰のために，何をさせようとして，「子ども」を産まねばならないというのか，その目的が見えてこないのである[5]。

このように指摘し，その場合子育ては，「成果主義の現代にあって成果の見えない努力を強要される」[6] ことがらと捉えられるという。子育ての担い手たちが，「家」のための子育てという大義を失った今，子育ては，社会からの支えもなければ共感できる目的も持ちにくい，個々人各々の営みとして浮かび上がる。

母親になったことそれ自体を後悔しているという女性を対象に研究を行なったオルナ・ドーナトは，後悔を「取り消せないことを元に戻したいという願い」と定義した[7]。そして，「法律の領域では，後悔を表明することが，自分の行動に責任を負うことだと見なされるのに，子育てと母性に関しては，母の責任の放棄として認識される」[8] と指摘する。これはつまり，女性にとって母親が，理性的な行動の「選択肢」ではなく，当然そうなるべきものとして設定されているものだという指摘である。さらにドーナトは，フロイトにより「母はそれ自体が人ではない」と述べられたことに言及し，母親を，「他人の人生に溶け込んでアイデンティティを失ってしまう」ものだと述べる[9]。そしてこの状態は，「子育て期」の一時的なものではない。「配偶者なら，少なくともそばにいないときは，ある程度の自由があります。でも，子どもの場合，そばにいなくても，常に心の奥に存在するのです」というような状態は，子どもが成人しても相変わらず存在する[10]。また，ドーナトは以下のように述べる。

> 制限や終わりが見えない責任は，必ずしも父親の存在や貢献に影響を受けるとは限らないようだ。母が他の人に支援を頼ることができ，父親が子育ての対等なパートナーであったとしても母であること自体は終わりのない物語であり続ける―そして私の研究対象の母たちにとって，そのことが侵略的で抑圧的なのだ[11]。

本田とドーナトの指摘からは，子育て当事者の苦しさを以下のように捉えることができる。

社会から共同体性が薄れ，子どもを持つことの動機が集団から個へ移行し，子どもを持つことは社会的要請からではなく，「自分」で決めたこととされる現代社会であるが，そこにおいても特に母親は，子どもを持つこと，子どもを育てること（母親であること）に関して「人であること」が認められていないと感じている。これはつまり，母親という存在を主体的に生きることができていない状態であり，この苦痛は，子育ての「労働」（肉体的な大変さ）の部分をサポートされることのみでは解消されないのである。

松永（2012）は，ある子育て支援センターにおいて「親が子どもから影響を強く受けて生きている状態から，親が個人として自分で自分を律する状態，つまり主体的な状態，へと変化することができる」[12] 姿を捉えている。

「地域子育て支援センター」は，「政府が作成したエンゼルプラン（1997年）によって，全国的に展開された事業の一つ」であり，事業展開から10年が経った時点では，「スタッフが経験を通して」ニーズを明らかにし，その結果，一般的には「広場型子育て支援の形式」がとられるようになったという[13]。松永がフィールドとした「A市子育て支援センター」は，「フリースペースと電話相談を活動の基盤」としており，フリースペースは，来所した親子が遊んだり，親同士，またスタッフ（「子育てアドバイザー」）と会話をしたりできるように環境構成されており[14]，子育てアドバイザーは「多重な状況における身体行為による援助」を行う重要な役割を果たしている[15]。松永はここで，親子で共に来所する母親が，同じ状況で来所する他者，そして「身体表現による援助」により場を調整するスタッフとの交流により，「他者の視線を通じて自分を見つめることによって親子が主体性を獲得する」様子を描いている[16]。この状況を松永は，「『A市子育て支援センター』に通う親子の中には，日常生活の中で倦みがちな子どもの世話…(中略)…これらを家で行うことには嫌気を感じているが，『A市子育て支援センター』で行う時には楽しむことができる，という親が多くいる」といい，「これは，日常生活の場を演劇空間と捉え」たGoffmanの「役割距離」の概念で理解できるという[17]。ここで興味深いのは，松永が，「日常生活の中で倦みがちな子どもの世話」を，母親から切り離せば子育ての苦悩が解消されるという方向性で論構築をしないことである。子どもと離れた時空間で過ごす時間は，子育ての労苦から解放されることであり，実際に多くの一時保育事業では「親の休養，気分転換」などの理由での利用も推奨されている。また，子どもから離れて仕事など他のことに打ち込むことは，親自身が主体的に生きることを可能にすることでもある。しかしそれだけでは，母親が苦痛を乗り越え，主体的に子育てをしているという実感には繋がらないだろう。母親たちが，「親と子が共に暮らす生活のペース」を保ちながら，子育てを通して主体性を生成すること，我々に今求められている子育て環境は，これが可能となる場だと考える。

研究方法

本研究は研究者自身が，自分自身の子育てを振り返って分析する方法を採用した。それは自分たち自身が子育てをする中で感じる違和感や，日本における子育て支援政策に感じる疑問を対象化して捉え，分析したいと考えるからである。自分の実感だけで論じるのでは研究としての客観性を担保することができないと考え，グループインタビューという形式を採用した。インタビューにおいて，それぞれの経験を描き出すことによって，自分達の経験を対象化することが可能となると考える。

例えば，ライフストーリー研究では，インタビューで生成された語りを通して，ライフストーリーを描き出すという方法が一般的である。そしてそれは，インタビュアーとインタビュイーの共同行為によって生まれるものであるとされているが，小林（2000）は，ライフストーリーには，自己の経験を語る「語り手」（第一のオーサー）とその内容を文章化する「書き手」（第二のオーサー）の「二人のオーサー」が存在すると述べている[18]。この視点に立てば，必ずしも「書き手」のみがライフストーリーを分析する立場にあるのではなく，「語り手」もそこに参加することが可能となる。

本研究ではこの視点を採用し，Aがインタビュアーとしてインタビューを進め，海外での子育ての経験をもつSとKに，複数の文化の中でどのように子育てを経験し，その多様な経験をどのように捉えているのか語ってもらった。そして語られたライフストーリーの内容を3人で分析するという方法を採用した。

インタビューの概要と分析方法

インタビューは2022年12月22日に80分にわたって行った。Aがあらかじめ設定した子育てに関する質問をする半構造化インタビューの形式をとった。インタビューはビデオ会議システム（Zoom）を使って行い，システムの録画機能を使って録画した。録画を用いて，会話のトランスクリプトを作成し，分析した。インタビュアーAとインタビュイーSとKは20年来の大学院時代の仲間であり，それぞれ国内外の異なる土地で子育てをしながら，定期的に連絡を取り合ってきている。

質問の仕方や順序はインタビュイーの反応や話の流れに応じてインタビュアーが決定したが，回答から派生した質問や雑談，インタビュイーからの質問も柔軟に取り入れて会話が進められた。

分析にあたっては，Bakhtin（1996）の「発話の宛名性」やSacks他（1974）の「会話の順番取り」[19]など会話分析の概念を根本に据え，笑いや言い淀み，繰り返しといった一見無意味に見える言語的指標にも注目してテクストを作成した。そして，語りをそのまま用いながら，そこでの相互行為がどのように行われているのかを，あるまとまりごとに記載する。そこでは

表1　Sの子育てに関わるライフコース

年齢	ライフコース	S本人の状況
30歳	トルコ，イスタンブルで第一子出産	トルコの幼稚園でボランティア活動を行う
32歳	日本に帰国 第一子の保育にはベビーシッターや一時保育を利用する。	短大で非常勤講師として働く
33歳	第二子出産	
34歳	第一子幼稚園入園（3年保育） 第二子の保育にはベビーシッターや一時保育を利用する	大学の非常勤講師として働く
37歳	第一子小学校入学 第二子幼稚園（第一子と同じ幼稚園）入園	大学の非常勤講師として働く
38歳	夫のインド赴任のため転居 第一子，第二子ともアメリカンスクールに編入	インドの幼稚園でボランティア活動を行う
40歳～現在	新型コロナウィルスの流行により緊急避難で帰国，そのまま日本に本帰国となる。 第一子小学校復学 第二子小学校入学	大学の非常勤講師として働く

表2　Kの子育てに関わるライフコース

年齢	ライフコース	K本人の状況
28歳	第一子出産	第一子妊娠まで専門学校で専任講師として働く
30歳	第二子出産	
32歳	第一子幼稚園入学	夫がアメリカに赴任。その後チェコ共和国に赴任
33歳	チェコに転居	
34歳	第一子インターナショナルスクール小学校に入学	
35歳	第二子インターナショナルスクール幼稚園に入園	クラスレプ（母親代表）で保育に参加
36歳	第一子　プラハ日本人学校入学	アートヒストリー研究会，チェコ事情研究会に所属
37歳	第二子　プラハ日本人学校転入	
38歳	日本に帰国 第一子，第二子，小学校編入	帰国2年目にPTA役員となる
41歳～現在	第一子　中学校入学	社宅世話人代表を務める

KJ法のように一行見出しが設けられ，その文節内の中核となるところが提示された 。筆者の解釈に基づく結果の記述となるが，その場の臨場感を伝えること，情報をコンパクトにまとめることをより優先した。

なお，SとKの子育てに関わるライフコースの概要は表1，表2の通りである。S，K共に，子どもが幼児期及び小学校の低学年に海外と日本での子育てをしており，それぞれの国の子育て環境，子育て支援政策等について実感として比較をすることが可能である。

研究結果

子育ての当事者性を共有してくれるありがたさ

語り1「自分の子どもみたいにケアしてくれるのが嬉しかった」（トルコ）

A：なるほどねー。で，実際産まれて，子育てし始めて，何か…なんだろう。気付いたことというか，実際はどんな感じでした？

S：えーっと，実際も，うーんと，そうだな。嫌だと思うことはなかったかなー。子どもを連れてて嫌な思いを…それは中で，家の中で大変なことはもちろんあって，（A：うん）夫もずっと平日はいなかったから，（A：そうだったよねー）ずっと二人っきりでほんとに過ごして，週一回夫が帰ってくるか来ないかだったから，病気の時は心配…でも，あ！　あれだ。お手伝いさん来てた！　週3とか，三日間，月水金で。彼女も子どもが好きで。

K：そういえば言ってたねー！　すごい世話をしたくてしたくて，

S：そうそうそう

K：プラスアルファーのお仕事までしてくれちゃったみたいな。

S：あーそう。うん。何回か，彼女に預けて。預けたり，彼女がいるときは私と3人で食事をするんだけど，私とNとお手伝いさんと離乳食とか食べるんだけども，何か当たり前のようにその彼女が世話をしてたんだけども，世話をしてくれるそのものよりも，自分の子どもみたいにケアしてくれるのが嬉しかった。

A：かわいがってくれてる。

S：そうそうそう。それはまあ結局預けなかったんだけど，N（第一子）のことを一日自分のうちに連れて行くって言っていて

A：うーん

S：自分のうちに連れて行って，一晩お泊りをさせるって。一歳くらいのとき！

A：ハハハハハ＜皆笑う＞

K：もう勤務時間外だよね。

S：まあまあ，トルコ人の住宅事情を考えると，万が一地震とかあるとね…＜笑う＞それはちょっと。（A：うん）預けなかったけど。
娘のことを好きだ好きだと言ってくれる人がすごく多かった。
A：うーん！　なるほどね。

この場面は，トルコと日本，インドと渡り歩きながら子育てをしたSが，最初の子育て環境であるトルコで，第一子のNが産まれてから帰国する2歳手前までの間に，お手伝いさんをはじめ，周りの大人たちからNが自分の子どものようにかわいがられてきたことを回想しているシーンである。世話をしてくれる行為そのもの以上に，職務を越えて，まるで子育ての当事者のようなお手伝いさんの姿に率直な喜びを表している。

また，トルコ人のNへの溺愛ぶりは次の会話からも推測され，親子関係を凌駕するかのような関係性を瞬時に構築できるトルコ人とNとの相性の良さについても言及していく。

語り2「私のところに来たくなくて泣いてた」（トルコ）

A：じゃあ大変だったこととかは，なく？　ハッピーだった？　ハッピー。
S：まああのー，そうねー，まだ一人目だったから，比較対象もなく，何が大変だったのかも分かってなかったのだけど，まあNが楽な子だったって。いっぱい寝て，人見知りもしない。だって，お買い物に行って，ちょっとパパの洋服見ようって思って，紳士服だから男の人ばっかなんだけど，紳士服売り場の人がNのこと抱っこしてるって言うから渡したら，その人から離れなくなっちゃって，
＜A：笑う＞私のところに来たくなくて泣いてた。
A：ハハハハハ！
K：えーーーー
S：トルコ人と相思相愛なところがあって，何だか…
A：へーーーー。そうやって気軽に見てくれる人がいるっていうことか。

語り1，語り2から，トルコ人がNをかわいがり，子どもや子育てが良いものであると捉えられる姿に共感を覚え，Sもまた，子育てをハッピーなものとして捉えている様子が分かる。一方で，日本に帰国した時の体験をAに尋ねられると，次のように述べる。

語り3「謝ってばっかで弱い人間なんだなって」（日本）

S：あーーーやっぱりそのー，やっぱ子どもを連れて歩いちゃいけなかったんだなって後悔したことがいくつか…（A：うーーん）覚えてるかな。
A：たとえば？

S：移動形式がね。トルコでは電車とかないから，そういうのには乗らなかったんだけど。
A：うーーーん
S：なんかすごく覚えてるのが，（A：うん）新橋だったと思うなー（A：うん）新橋に行ったとき，ベビーカーを…J（第二子）がまだ産まれてなくて，ベビーカーを押してて，階段しかなくて（A：うん），エレベーターも，エスカレーターもなくて，で，あのーそのときに駅員さんに「エレベーターってないんですか？」って聞いたらもう，睨み返されて，「エスカレーターもありません」ってそれだけ言われて立ち去られた＜A：苦笑いをする＞ことがあって，で，そんな恰好でくんじゃねーよって言われてるんだなあって。
うーーん，10年前って日本も。今だったらね，駅員さんが手伝ってくれるのもあるんだろうけど。（A：うーん）10年前は…あとは，目にした光景で，抱っこしてる抱っこ紐とベビーカーに乗せてるお母さんがエレベーターで上ってきて，そのときにエレベーターが途中階だったんだけども，駅でその－，車いすの人を駅員さんがエスコートしてて，そのときに駅員さんがすごく冷たい目でお母さんにこういう風にやって＜首を横に背けるジェスチャーをする＞要は，降りなさいと。（A：うんうん）あなたは使っちゃいけない人間ですと。そして，自分が連れている車椅子の方を乗せて，お母さんがすごい泣きそうな顔をしながら降りてたっていうのがすごい印象的で，覚えてる。その，トルコで，男性がすっごく赤ちゃんに優しかったから，（K：うん）そういうのはすごく。他が良かったとしても，とても印象に残ってる。（A：うん）
　多分あの，エレベーターがあったり，清潔だったりとか，水がすぐに飲めたりとか，子育てにいっぱいいい環境があったはずなんだけども，（A：うん）そういうショックがすごく大きかった。（A：うんー）やっぱりあの，ベビーカー。ベビーカー絡みが多いかな。ベビーカーがちょっと当たっちゃったときの女の人の反応とか…（A：うーーん）ごめんなさいっていってるんだけど無視されたりとか。（A：うんー）舌打ちされたりとか。（A：うん）私ってこんなに，何て言うの？　謝ってばっかりで弱い人間なんだなって。

Sは本来であれば子育てのしやすさに寄与するであろう清潔であること，水がすぐに飲めることなどを日本の良さとして挙げつつも，語り1・2までで感じた子どもや子育てが良いものであるという共感とは真逆の，迷惑なものとしてメッセージを受け取り，自身を弱い人間として捉える体験として認識していることが分かる。

Aは次にKにも話を振り，チェコでの体験がどのようなものであったのかを問うと，Sの日本での体験と対比となるような形で，Kのチェコでの子育てが心地よいものとして描き出されていく。

どこにでもある子育て環境

語り４「社会がもう，子どもに慣れてる」（チェコ）

K：だから，乳児期は日本で生活をして，それこそ外にあまり歓迎されてないかなって思って，狭い中で生活していました。（A：うんうん）で，チェコに行ったら，やっぱり，何ていうんでしょう。社会がもう，子どもに慣れてるっていうか，どこに行っても子どもの為の場所，居場所と空間みたいなのが用意されていて，それは例えばレストランに遊び場があったりとか，町の駅のところにも広場があってちょっとした遊具があったりとか（A:うん），あと食べ歩きも全然オッケー！だったので（A:うん），スーパーで子どもが買う前のパンとかをかじりながらレジに行って「食べました！」とかも後から払えば全然オッケー。（A：うんうん）
すごくだから，垣根を感じないまま家から出て，家の中から外の境目がすごく曖昧な状態で生活できてたなって思って，うーん，すごく居心地良かったです。
A：うん。
K：で，トラムとかも走ってるんですけども，それも3つくらい高い階段があって，上らないといけない旧型のトラムとかは，あのー若い男の子とかが何も言わないのにひょいって持ち上げてくれて，降りるときも当然のように違う人が降ろしてくれたり（A:うんうん）なんかそう，外に出ることに全く不便を感じなかった。（A：うんうん）

このように，一見不便を強いられがちな親や親族のいない海外での子育てにも関わらず，子どもの為の居場所が用意されているような社会を「家の中と外の境界線がはっきりと引かれない社会」と呼び，そこでの体験が心地よいものとして描かれることが可能になったのである。

そして，次の場面では，インタビュアーのAが日本の子育て支援や子どもに対する手厚さについて問い，Kが公的な子育て支援施設の多さに言及した後，Sが前近代的な共同体や拡大家族といった昔ながらの家庭環境が未だ残るトルコでは，その必要性がないことを挙げる。

語り５「誰も使わないからどこにもない」（トルコ）

S：そう，そう思ってたんだけど…そう。確かにその，親子の居場所をわざわざ，公で提供してくれるのって面白いなって。
何か子どもだけ預かるっていうのは，スウェーデンだったり。うーん。インド・トルコはないけど。そう，トルコは制度的にはあるんですけど，（A：うーん）赤ちゃんから預かるよっていうのは。（A：うん）あるんですけど，誰も使わないからどこにもないっていう。
A：ハハハ＜笑う＞

S：私の街にはそれないよって
A：やっぱりそういう場所がなくっても，見てくれる人がいるし，何か遊べる場所もあるし，っていう事なんでしょうね。昔の日本みたいに。
K：うん－
S：うん。そう思う。
A：空地とか道とかで遊べるし，そこらへんに誰か見てるおじさんはお茶飲んでるし，
K：フフフ
S：そうそう。子どもが子どもを何て言うのかな…私もそのトルコ人のうちに子どもを連れていくと大体兄弟がいるから，そこの中でいたっていうのは。（A：うんうん）お母さんが私のところにやってきて，何か10歳くらいのお姉ちゃんがいるの。その子にNを見せとけばいいじゃないって。（A：うんうん）ちょっと心配なんだけど，なんか勢いに押されて（A：うんうん），そういう集団によくNはいたかなって。
A：うん。そういう，日本もね。ひと昔ふた昔前だったら（K:うん）そういう感じでしょう，きっと。

語り5からは，AはSとKの海外での子育て体験をかつて日本にもあった共同体が存在していた子育て環境と重ね合わせ，肯定的なものとして捉えられていることが分かる。

それでは，具体的にどのような経緯で新しい社会やコミュニティーの中で信頼感を獲得していったのか，Aは問う。

母親が持つ信頼のまなざし

語り6「すごく面倒を見てもらってた」（トルコ）

A：具体的にどういう経験の中から，信頼感っていうのは生まれてきたのですか？お子さん産まれる前の。
S：すーごい子どもが好きで，すーごい世話好きなんです。トルコ人って。それが見るからに分かって。
A：うーん！
S：で，やっぱりあの，こういう仕事をしてたから，幼稚園に行ったりもしてたし，（A：うん）あのー，トルコの子どもにすごく関わってきたんだけど，（A：うんうん）その大人たちがすごく子どもを中心に生活してるような生活とか，子どもを中心にっていうか，子どものことを大事にしてるし，男の人とかもとっても子どもが好きななのが分かったから，（A:うんうん）一緒に外国人の友達の赤ちゃんとかも歩いていると，まあ一緒にカフェに入っても，トルコ人に優しくしてもらってるのは見てて。あと私

が日本人ってだけで，すごく面倒を見てもらっていた。
A：うーん！
S：うん，子どもがいない時点でも面倒見てもらってたから，（A：うんうん）そこは信頼してた。

Sは出産する前の2年間で経験した人々の優しさや子どもが大事にされていた様子を挙げ，これらの積み重ねによって信頼感を深めていったことを語る。

Kもまた，インタビュー後日談において，チェコでの犬の散歩仲間のおじいさんおばあさん，子どもの入院時に助けてくれた同室の母子との交流などを通して，現地の人たちと生活をしながら信頼関係を築き，自身もまたその国の一員としてのアイデンティティを獲得していく様を浮かび上がらせた。

ここでは共通して子どもだけでなく，自身もまた「面倒を見て」もらうといった共助の体験があったことが大きかったように語られた。

続く語りでは，S自身が，他の母親たちよりも自分自身がより，他者を信頼して自身の子育てに入れ込むことにオープンである可能性を示す。

語り7「Don’t touch me」（インド）

S：あれ，Aさんにはこの話したっけ？
「DON’T　TOUCH　ME」のTシャツがあったっていう
A：あー知らない
S：あのー。インドで，割と一緒になったフランス人が，そのいつも飛行機に乗る時に，旅行好きであったりするんだけど，子ども二人に英語で「DON’T　TOUCH　ME」あと，タミル語で「DON’T　TOUCH　ME」の訳を書いているTシャツを着て，そう。でインド人たちが触るから着せてるっていうんだけど，その主体がこの子たちが嫌がるからって。
A：うんうん。
S：うん，だからもちろん母さんもいやな顔をしてるんだけど＜笑う＞（A：うんうん）あのー They don’t like it. 彼らが嫌だからって，どの人も必ずそう言うからって
A：まあその自分だからね。勝手に自分に侵入されたくないってことですよね？そお，西洋的な考え方ね。
S：私も，子どもたちもその考え方がなかったから。うん。
A：日本もそうなって来てるってことなのかしらね。
S：ね，触られたくないは，どう理解したらいいんでしょう？
A：ね，自分は触られたくないけど＜K笑う＞子どもはかわいがってくれてるからと思っ

ちゃう。だから知ってる人のお子さんを抱っこするのもすごく気を遣う，最近。
S：遣いますよね。
A：ね，抱っこしていいですか？とか，泣いててあやしたりしてあげようかなって思っても，「抱っこしてもいい？」って一応聞かないとなんか勝手にしたら向こうが嫌な思いをするかなって思うのがすごく難しいなって思って＜笑う＞
S：難しいですよね。
A：ねー何か，どんどん離れていきますよね？
KとS：うーん＜同調する＞

この場面では，西洋的な感覚では自分への侵略と捉え得る，勝手に子どもをべたべたと触る行動でさえ，「私も，子どもたちもその考え方がなかったから。」と別なる価値観を理解し，受け入れようとするSの姿勢が示される。

語り8「あんまり分かっていないトルコ人として参加しなくちゃいけない」（トルコ）

A：何かある意味，外国人のコミュニティーって，ちょっと特殊だよね？　きっと。皆周りに自分の親族とか，友達とかがいなくて，そこのコミュニティーが結構密だけど，ね，何かそこで楽しくやりたいって共通のアレがあるのかなーって思って。割と閉じてる世界じゃないですか。
S：うーーん，そうですね。
A：コミュニティーとしては何か，密，親密になりやすいのかなーって思ったりして。子どもの学校の友達とかじゃなくて，何か仲良くなる感じとかあるのかな。
S：確かに，駐在同士ってだけで，信頼し合う（A：うんうん）って感じになっちゃうのはあるよね？　何か，それで入れてもらった，パッと入れてもらったグループとかもあった。病院でアメリカ人のお母さんに会って（A:うんうん），あなたグループに入ってるの？　グループに入った方がいいよ，メールしてって言われて。駐在ってだけで信頼してもらって（A：うんうん），入れてもらって。
A：そういうコミュニティー，グループがあるんですね？　自主的な。
S：あ，うんうん。そういうのはすごくあった。（A：うーん）
A：自助だね。自助…共助か。公助じゃなくて。（K：うんうん）自分たちでそういう場所を作って，楽しむとか，助け合うっていうことをしてるんだね。
S：コミュニティーにいればそうで。個人でいえば，トルコ人のママたちの中に私が一人でいると，トルコ人の…あんまり分かっていないトルコ人として参加しなきゃいけない。何か，末っ子みたいな感じで。
A：あー！　うんうんうん！

S：うんー，だからさっき言った10歳の子に預けていい？っていうよりは，預けなきゃいけないって。
A：うんうんうんうんうん。
S：そういうもんよって感じ？
A：うんうんうん。なるほどなるほど。
S：うん，それでこっちでママたちはママたちで何かパイを作らなきゃいけない。
A：ハハハ＜笑う＞なるほどね！
S：あーだから，ママたちは忙しかったのかな？　お惣菜とかないから。
A：あー。何か買ってきて食べようとかじゃなくて，確かにね。うんうんうん。家事労働もたくさんあるしね。

ここでAは海外での外国人コミュニティーの特殊な親密な関係を説き，母親が信頼し合いやすい土壌があることを指摘した。Sはその部分を認めた上で，現地の人に個人で入る際も，彼らの子育て観を受け入れ，信頼感を築いていける可能性を示した。

考察

先行研究からは，現代社会では社会から共同体性が薄れ，子どもを持つ動機も個人に帰属するものとされるため，子育てについて集団で共感できる目的が持ちにくく，母親にとって子育てがしにくい状況にあることが示唆された。

本インタビューでもSが，日本で外出した時に印象に残った母親が忌避される体験を挙げながら，子育てについて「共感」とはほど遠い「迷惑」なるものとしてメッセージを受け取っており，子育てをしていい場所が「トルコではどこでもよかったのに！　日本ではここでしかしちゃいけないのかなって」と嘆いていた。一方で，トルコやインドでの子育て体験では，嫌な思いは一切しなかったと述べ，さらにトルコでは，自身の子どもNと関わるトルコ人の姿を通じて，子どもはかわいいものであり，子育てをとてもいいもののように感じられるといった，自身に共感する人があちこちに溢れている安心感を得ていることが示された。子育て支援としての公助が「トルコは制度的にはある」けれど，「誰も使わないからどこにもない」にも関わらず，である。

Aはトルコ社会にかつての日本にあった伝統社会の共同体に類似性を見ながら，Sが何故トルコ人やトルコでの子育てを信頼するに至ったかを語り6の中で探る。すると，Sは「子どもが好き」であり「世話好き」であるトルコ人の気質と，一見子どもとかけ離れた存在と見なされがちな「男の人」もまた，子ども好きであることを理由に挙げた。Kも語り4の中で，ベビーカーを「若い男の子とかも何も言わないのにひょいっと持ち上げてくれて」と述べた。このような，子どもや子育てとの関係が一見遠い存在のように思われる男性が子どもに関心を寄せる

姿は，優しさの象徴ともなり，社会全体が子育てをしている様子を表すのに効果的であった。同じ語りの文脈の中で，Kはどこにでも子どもの居場所があった社会を「家の中から外の境界がすごく曖昧な状態」と呼び，居心地の良さを謳った。

これらの語りから,「10歳の子に（赤ちゃんを）預けなくちゃいけない」とか（インド人が）子どもを触る，といった別なる価値観をも母親が受け入れながら，相手への信頼感を育て，子育て当事者が自分だけではなく，他者や家の外にまで広がるかのような感覚を覚えていたことが分かる。語り6においてSが，インドでの経験から，他者が自分の子どもに関与することについて自分自身が寛容であることを示しているが，これはSが，これに先立ちトルコで他者を信頼しながら子育てをする心地よさを経験していたことから生じることだと考えられる。このように，他者を信頼して子育て当事者を拡張する姿勢は「育てる」ことができるものであり，この感覚こそが母親の苦痛を和らげ，子育てのしやすさに大きく寄与していることが推測された。このことは，ネル・ノディングスのケアリング理論により，ケアするもの（母親の周囲の他者）とケアされるもの（母親）の関係性として理解することができ，今後の重要な分析課題としたい。

また，トルコやインドではお手伝いさんという子育ての担い手である拡大された子育ての当事者という自助の役割があることや，海外での外国人コミュニティーにある特殊な親密な関係性をAが指摘し，母親同士が信頼しやすい共助の土壌があり，新しい共同体に入るためのアドバンテージな側面があることを見出したことは大変興味深い。これはGoffmanが「日常生活の場を演劇空間」[20] と捉えたように，異国の地というダイナミックな演劇空間の中で，子育てを楽しむことのできる体験をしたと言えるであろうか。松永（2012）が子育て支援センターでそれを見出したように，この大きな演劇空間の中で，母親が自分で主体的に子育てをしている感覚を取り戻し，子育てを通して自身の主体性をも生成できていったのではないか。

まとめと今後の課題

本研究では，現代の日本社会において，より豊かな環境で子どもを産み育てるために，私たちに何が必要なのかを，日本・トルコ・インド・チェコといった多文化の中で子育てをしてきた子育て当事者たちの生の語りを切り口として見てきた。

まずは，海外での子育てを経験した母親たちが，日本での子育てとの大きな違いとして，周囲から子育てに関する「共感」を得て，子育てをする主体，母親である自分以外の人々も子育ての当事者だと感じることの居心地の良さを挙げていることを指摘できる。日本では一般的には子育て空間としては捉えられない買い物の場や公共交通機関利用の際も，子どもを抱いてくれる人がいたり，ベビーカーを持ってもらうことが日常的にあることにより，母親自身も子どもをかわいいものとして，子育てをとても良いものとして，主体的に受け入れられる土壌があることが分かった。つまり，日本のように公的な子育て支援が充実していないにも関わらず，

周囲の，いわば拡張された子育て当事者たちの存在により，母親にとって子育てしやすい社会になっていると言えるであろう。この社会では，母親たちが基本的に，共助的関係の中に生きていると理解することもできる。インタビュイーが挙げていた，ベビーカーの上げ下ろしや買い物中の抱っこが男性による「共感」的行動だったことを考えれば，今後父親，男性が共助的な関係性にどのように位置づけるのかも積極的に検討できるであろう。

またこの上で，海外での子育てで得られる特徴的な機会として，お手伝いさんやドライバーといった「身内」による自助や，外国人の子育てコミュニティーなどの共助を得るという経験が良きものとして挙げられている。このような自助・共助が有効に働くという状況が子育てにとって重要であることは，インタビュイーから，本来海外生活の「愚痴」としてのぼりがちな，日本での充実した公助への言及がなかったことからも理解できる。

一方，日本では，公助が充実しているにも関わらず，母親が「共感」を得難い社会になっており，子育てが依然として限定された人や場のものであり，母親が求める当事者性の拡大には課題があることが示唆された。共同体の喪失とともに衰退した自助・共助を補うべく公助が発達したのか，はたまた公助が発達したが為に自助・共助が衰退したのか。いずれにせよ，公助の充実が母親の子育て環境の改善に十分に寄与できていないのであれば，このスパイラルから抜け出す手立てを見つけ出すことが急務なのである。

本論文の中では紹介はできなかったが，インタビューの中でSが親の活動を重視する日本の幼稚園での体験を語る場面があり，そこで「母親であることを押し付けられ」，園での役割を与えられたことで，「本気でこの子のお母さんでいていいんだよ」と母親である自分を肯定できたと述べていた。ここからは，幼稚園での親子の活動を通して，新しい共同体の芽生えとなり，そこでの「共感」の共有体験によって母親自身が自分を肯定し，主体的に子育てをする環境を得ていく可能性を感じずにはいられない。

自分たち自身の周囲に目を向けると，例えば児童館での乳幼児クラブで仲良くなった人たちとその後定期的に集まる会を設けたり，子どもの習い事や民間の定期的な子ども向けイベントで知り合ったお母さんたちと仲良くなり，その後も自主的に遊びのサークルを運営したりする例も多々見られる。このように，親同士が繋がって，共に子どもの成長を見守ったり，子育てを相談したり，楽しい時間を親子共に過ごしたりする仲間を自分たちで構築していく共助的なつながりをもてる人ももちろん存在する。また，習志野市のニュータウンで父親たちが中心となって，地域コミュニティを構築した例なども存在している（岸：1999）[21]。

しかしながら，このような共助的関係に頼っているだけでは，今日の日本において，すべての人が子育てを主体的に行えるような環境にはなっていない。つまり，子育て支援政策として，共助的な関わりを生み出す機能が求められるといえる。

浅野（2014）は，スウェーデンの親共同組合就学前学校という取り組みの中で，親は単に子どもを預けるのではなく，自身も必ず入らないといけないグループがあり，保育の組織の一員となりながら保育を「共同生産」する立場になることの重要性を説く[22]。バムスダッド（Vam-

stad2007）は，「共同生産」をサービスの生産に利用者を導入することによってトップダウンの同意を壊し，「民主主義の回復のための原動力」として考えられると述べ，浅野はまた，この取り組みを通して，保育という活動が，親子だけでなく，保育者，地域の人々とともに創り上げていくものという保育の原点に立ち戻ることができるという[23]。

また，田澤，木村（2018）は，「近年，地域の子育て家庭向けのイベントや子育て広場などを実施する園が多くなりました」「このようなイベントや子育て広場を開催することには，大きな意義があります」と述べる[24]。地域開放イベントや，カフェの併設，マルシェやコンサート，大人向けのワークショップ等，様々な幼稚園や保育所，こども園等で，気軽に園に集える仕組みが考えられている。サービスとしての子育て支援ではなく，親子が園に集い，関係を築けるような取り組みが各地で模索されていると言えるだろう。

このように共同体が喪失した日本の近代社会では，多くの親子が関わる幼稚園・保育所の活動や子育て支援センター等での子育て支援を通して，新しい共助的集団を生成させ，より豊かな子育て環境を創造していけるのではないか。今後は共助的な関係を支援する，子育て支援グループ等の調査を通して，具体的な方策について検討したい。

注

1）松居和　『ママがいい！母子分離に拍車をかける保育政策のゆくえ』グッドブックス, 2022 p.34
2）小川博久『遊び保育論』萌文書林, 2010 pp.12–15
3）小川博久　上掲 2010 p.13
4）本田和子『子どもが忌避される時代―なぜ子どもは生まれにくくなったのか―』新曜社, 2007 p.18
5）本田和子　上掲2007 p.17
6）本田和子　上掲2007 p.250
7）オルナ・ドーナト著　鹿田昌美訳『母親になって後悔してる』新潮社, 2022 p.88
8）オルナ・ドーナト著　上掲2022 p.293
9）オルナ・ドーナト著　上掲2022 p.119
10）オルナ・ドーナト著　上掲2022 pp.175–176
11）オルナ・ドーナト著　上掲2022 p.187
12）松永愛子　『地域子育て支援センターのエスノグラフィー』風間書房, 2012 p.84
13）松永愛子　上掲2012 p.23
14）松永愛子　上掲2012 p.24
15）松永愛子　上掲2012 p.85
16）松永愛子　上掲2012 p.65
17）松永愛子　上掲2012 p.65
18）小林多寿子　「二人のオーサー　ライフヒストリーの実践と提示の問題」『フィールドワークの経験』好井裕明, 桜井厚編, せりか書房, 2022
19）好井裕明, 山田富秋, 西坂仰『会話分析への招待』世界思想社, 1999 p.3
バフチン（Bakhtin）. M. 新谷敬三郎他訳『ことば　対話　テキスト』
ミハイル・バフチン著作集8巻　新時代社, 1988　p.180
20）松永愛子　上掲2012 p.65

21）岸裕司『学校を基地にお父さんのまちづくり』太郎次郎社, 1999
22）浅野由子「第6章　スウェーデン：親子と保育者の「共同生産」」池本美香『親が参画する保育をつくる―国際比較調査をふまえて』勁草書房, 2014 p.110
23）浅野由子　上掲2014 p.110
24）田澤里喜, 木村創「第8章　子育て支援　」田澤里喜，若月芳浩編著『保育の変革期を乗り切る園長の仕事術』中央法規, 2018

参考文献

浅野由子「第6章　スウェーデン：親子と保育者の「共同生産」」池本美香『親が参画する保育をつくる―国際比較調査をふまえて』勁草書房, 2014
小川博久『遊び保育論』萌文書林, 2010
オルナ・ドーナト著　鹿田昌美訳『母親になって後悔してる』新潮社, 2022
岸裕司『学校を基地にお父さんのまちづくり』太郎次郎社，1999
小林多寿子「二人のオーサー　ライフヒストリーの実践と呈示の問題」『フィールドワークの経験』好井裕明,桜井厚編,せりか書房, 2000
田澤里喜, 木村創「第8章　子育て支援　」田澤里喜，若月芳浩　編著『保育の変革期を乗り切る園長の仕事術』中央法規, 2018
ネル・ノディングス著,立山善康訳,清水重樹訳,新茂之訳,林泰成訳,宮崎宏志訳『ケアリング―倫理と道徳の教育　女性の観点から』晃洋書房, 1997
本田和子『子どもが忌避される時代―なぜ子どもは生まれにくくなったのか―』新曜社, 2007
松居和　『ママがいい！母子分離に拍車をかける保育政策のゆくえ』グッドブックス, 2022
松永愛子『地域子育て支援センターのエスノグラフィー』風間書房, 2021
好井裕明,山田富秋,西坂仰『会話分析への招待』世界思想社, 1999

Issues and Potentials of the Parenting Environment in Japan: As Revealed by the Narratives of Parenting Experiences in Turkey, India, Czech Republic, and Japan

Satoe KIKUCHI, Kayo ONOUE, Ayano TAMPO

Abstract

This study was supported by members of parenting parties who have raised children in foreign countries such as Turkey, India, the Czech Republic, and Japan. The narratives of mothers about their experiences of nurturing children abroad revealed that it is easier to receive sympathy and that children and parenting are extremely valued. These experiences allowed mothers to share parenting-related feelings and experiences, which is crucial in contemporary societies in which the sense of community has disappeared from residential colonies. This paper showcases lively narratives of being ensconced in rich cultures and being surrounded by affluent neighbors. The paper also highlights how we can undertake parenting issues and expand the potential of the parenting environment in Japan.

Keywords: parenting party, narrative, sympathy, affluent society, initiative feeling,parenting support